Travel vaccine と Life course immunization

Travel vaccine and Life course immunization

西園晃

Akira Nishizono

大分大学医学部微生物学講座、大分大学グローカル感染症研究センター

Department of Microbiology, Faculty of Medicine

and

Research Center for Global and Local Infectious Diseases

Oita University

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）等のパンデミック、高齢化による疾病構造の変化、自然災害に伴う健康危機管理の観点などから、感染症予防におけるワクチンに関する認識が改めて高まり、小児から成人に至るまで VPD（Vaccine Preventable Disease）を対象として、生涯を通した予防接種の取り組みが、改めて認識されるようになってきた。

今なお多くの途上国では、乳幼児に対する予防接種が感染性疾患に対する最も費用対効果の高い介入方法である。その一方で、高齢化率の高いわが国では、小児期に接種した予防接種による免疫記憶の多くが、社会における感染症の制御と集団免疫の低下とともに減衰している。また医療の進歩に伴い、免疫抑制剤などにより多くの疾患の制御が可能になった半面、内在化した病原体の再活性化による病態に直面する機会も増えてきており、これまでの乳幼児期における予防接種に加え、人生の各ライフステージで必要なものとして、場面やリスクに応じた予防接種を考えなければならない時代に来ている。

この中で海外への渡航者数は、順調に COVID-19 以前に復してきており、その数は今や国民の 7 人に 1 人にのぼる。これまでの海外旅行者に加え、留学・企業による海外勤務者派遣やその家族の帯同、シルバーエイジの観光旅行ブームなどからますます多様化している。わが国でも一般化しつつある『海外渡航外来（トラベルクリニック）』は、海外への観光やビジネス渡航、海外赴任、留学などで長期間海外に滞在する者を対象にした「健康相談」と「予防接種」を対象とし、現地で罹患する可能性のある感染症や渡航の際の健康リスクについて、予防策や現地の病院の診療事情を提供、ワクチン接種（Travel vaccine）などを行なうものである。

本講演では、乳幼児期以降の青年期、妊婦、成人特に高齢者、医療従事者、海外渡航者などのリスク者を念頭に、生涯を通した予防接種（Life Course Immunization）という取り組みを積極的に推進することが、戦略的健康・経済政策として有効であり、健康的なライフスタイルの新たな社会規範となるべきとの内容を紹介し、より多くの関係者が日常の医療の現場においても、ワクチンによる「攻め」の医療を進めることで予防可能な疾患の負荷軽減につながることを期待したい。